

世界災害救急医学会 (WADEM 2023 Killarney) でパネルディスカッションに登壇しました (2023/5/9-12)

テーマ : Complexity and Continuity: Caring, Coping, and Overcoming in an Increasingly Challenging World.
会場 : Killarney Convention Center (Killarney, Ireland)

2023年5月9-12日に、アイルランドのキラニーにおいて開催された世界災害救急医学会 (World Association for Disaster and Emergency Medicine, WADEM) において、災害医療国際協力学分野の江川新一教授がパネリストとして登壇しました。2019年末以降、新型コロナウイルスパンデミックのため、世界中の医療従事者が外出を控え、病原体を最も弱い立場にある人々の環境に持ち込まないことを心掛けた4年間はようやく終わり、対面での開催が可能となりました。感染症、テロリズム、武力紛争、自然ハザードのすべてを含むオールハザードに対して、どのように備え、対応し、復旧、復興するか、そして、人と社会のレジリエンスがどのように達成されるかが話し合われました。

アイルランド政府の新型コロナウイルス対応の先頭に立って活躍された Ronan Glynn 博士の基調講演の後、江川教授もパネリストとして加わり、公衆衛生と災害医学について幅広い議論が行われました。新型コロナウイルスは世界中で災害そのものでしたが、共通したことは、各国の政府に対する人々の信頼が問われたことでした。正体が不明な病原体に対して確信をもって言えることは少ない状態であっても、Glynn 博士は不確実な部分があることをはっきりと人々に伝えることは、政府に対する信頼を失うことにはつながらないことを強調しました。一般の人々も、そして専門家であるはずの対応者も白黒をはっきりさせようとするのは当然の気持ちですが、現実には中間のグレーであることが多いことをわかりやすい言葉で人々に伝えることの重要性が話し合われました。また江川教授は、「人はいつか必ず死ぬこと」を説明し、科学的に正しいことを説明することだけがリスクコミュニケーションではないことを提言しました。リーダーシップという言葉も、定義によってその存在が変わります。最終的な意思決定は個人個人にあるのです。

世界災害医学会は2年ごとに開催され、今回は 2025 年に東京で開催されます。日本の災害医療体制を担っている日本 DMAT 事務局がある国立病院機構災害医療センター院長の大友康裕教授を会長として、幅広い日本の災害医学関係者が組織委員会となっています。次回大会のテーマは、「Governance in the Face of VUCA: The Power of Knowledge, Courage, and Solidarity in Health System」となることが決定されました。「VUCA」は Volatility (変動性), Uncertainty (不確実性), Complexity (複雑性), Ambiguity (曖昧性) の頭文字で現代社会を表しています。当研究所の災害レジリエンス共創センターは、まさに現代社会において、人と社会がどのように災害を乗り越え、しなやかに、よりよく復興するかをめざしており、そのテーマとも合致しています。社会のレジリエンスは人の心と体の健康なしには達成できません。災害医学という言葉は狭いようで実に広い保健医療の意味を含んでいます。保健医療界だけではなく社会全体で、オールハザードアプローチ、事後対応よりも事前の備えを大切にすることが必要です。

文責 : 江川新一 (災害医療国際協力学分野)
(次頁へつづく)



WADEM 2023 Killarney



公衆衛生に関するパネルディスカッションで
討論する江川新一教授



災害と健康危機管理研究に関するWHO
ガイダンスの出版にかかわった方々と



WADEM 2025 Tokyo のテーマ
「VUCA と向き合うガバナンス
知識、勇気、連帯の力」
(VUCA: Volatility (変動性)、Uncertainty
(不確実性)、Complexity (複雑性)、
Ambiguity (曖昧性))